

## 〔翻訳〕

# チャンズー・ソン 「アイデンティティ・ポリティクスと韓国における韓国系中国人移民がいだく『故国』の意味」

角 田 猛 之

## 目 次

訳者はしがき

本論文の概要

### 1. 序

インタビューと参与観察

### 2. 歴史的なコンテキストにおける朝鮮族の「故国」

### 3. 民族的な故国との再度の結びつき

### 4. 「民族上の故国」での疎外と「生国」の復活

民族上の故国での疎外 生国の復活

### 5. 「故国」とアイデンティティ・ポリティクス

結 論

## 訳者はしがき

本稿はオークランド大学文学部「文化・言語・言語学」学科 (School of Cultures, Languages and Linguistics) のチャンズー・ソン (Changzoo Song) 上級講師 (ハワイ大学政治学博士) の論稿「アイデンティティ・ポリティクスと韓国における韓国系中国人移民がいだく『故国』の意味」(Identity Politics and the Meaning of 'Homeland' among Korean Chinese Migrants in South Korea) (Urban Anthropology, vol. 43 (4), 2014 所収) の全訳である<sup>1)</sup>。この論文は、移民とりわけ朝鮮族のアイデンティティ問題を専門とする韓国系ニュージーランド人のソンが、数度にわたる韓国、中国でのフィールドワークにもとづいて執筆したものである。ソンはこの論文において、主に中国東北地方の延辺朝鮮自治区に居住する韓国系中国人たる「朝鮮族」(Chosŏnjok) が抱くアイデンティティ=彼らの「故国」概念の変遷を、つぎのような19世紀後半から現在にいたる中国東北地方と朝鮮半島に生じたさまざまな歴史的事件や背景のもとで、朝鮮族へのインタビューと参与観察にもとづいて分析している。すなわち、中朝国境を越

チャンズー・ソン「アイデンティティ・ポリティクスと韓国における韓国系中国人移民がいだく『故国』の意味」  
えての貧しい朝鮮民族の中国東北地方への移住、「満州帝国」と中華人民共和国の建国、朝鮮戦争の勃発とその影響、そしてとりわけ1990年代以降の中国の急速な経済発展と社会変化、そして韓国での金融危機と経済的衰退、等々である。

本稿の理解の一助としてソンのごく簡単な経歴と主たる研究関心を掲げておく。

## [1] 主な職歴

2012-現在：オークランド大学文学部上級講師，同大学韓国研究所・所長

2001-2002：国立リヴィウ大学（ウクライナ）比較政治学講師

1999-2001：リガ・ストラディンス大学（ラトヴィア）比較政治学講師

1996-1999：ハワイ大学マノア校比較政治学・アジア研究指導員

## [2] 主たる研究関心

韓国と韓国系ディアスポラが抱くナショナリズムの以下の文脈での分析

1. グローバル化，すなわち越境する移民の増大，多文化主義，人口統計学上の危機（高齢化社会，出生率低下，持続的な移住），等々に直面して韓国の民族的ナショナリズムがどのように変化してきたのか；
2. 国境を越えてナショナリズムが拡大することにより，国民国家がいかにしてそのようなグローバル化の影響力を獲得するのか（非領域化されたナショナリズムとディアスポラの包摂政策）；
3. 中国や旧ソ連から自民族国家へ帰還した韓国系ディアスポラが，民族上の故国や，生国（中国と旧ソ連）との関係——アメリカのような豊かな西洋諸国からの移民との対比で——におけるアイデンティティ上の変遷を，いかにして経験してきているのか；
4. 民族的なナショナリズムがポストモダンな現実（ここでは国際的な移民労働者が通常である）においてどのようにその力を喪失し，文化的ナショナリズム（したがって韓国人は，民族上のナショナリズムへの強固な信念に反して，中国あるいは北朝鮮からくる民族的同胞を拒絶する）あるいは市民的ナショナリズム（韓国系中国人で中国人意識を強く有する，韓国での民族的回帰のための移住者の場合）に転換しているのか；
5. さらに，朝鮮民族のディアスポラの文化の変容（とくに食べ物と言語）と，韓国政府系の研究所の要請により数本の論稿を刊行した，韓国とニュージーランドとの関係についても関心を有している。

1 : ソン氏が研究プロジェクトの関係で来日中の2015年10月19、20日に関西大学に来学いただき、私の担当講義である「比較法文化学」振り替え講義(10月19日3限目)として“Japan, China and Korea: Cultures in Comparison”というタイトルで講義をしていただいた。また、同日4限目には私の担当する法社会学演習1、および、10月20日には、同じく私が担当する留学生コースの“Law and Politics in Japan”(3限目)と法社会学演習2(4限目)において、韓国と中国、日本の文化比較に関する特別講義を担当していただいた。ここに記して謝意を申し上げます。

Changzoo Song was so kind to visit the Kansai University on 19th and 20th, October, 2015 during his staying in Osaka for his research project. And he gave a special lecture, “Japan, China and Korea: Cultures in Comparison” at my undergraduate lecture course “Comparative Theory of Legal Cultures” at the third period of 19th. Furthermore, he gave a special lectures on the similar topic at my “Law and Politics in Japan” for foreign student course (third period of 20th) and at 2 seminar courses of Sociology of Law 1, 2 at 4th period of 19th and fourth period of 20th.

From the bottom of my heart I would like to give my gratitude for his very nice lectures and conversation with my seminar students.

以下において本論文を訳出する。

**本論文の概要：**本稿は、中国に居住する朝鮮族(ethnic Koreans)が有する「故国」(“homeland”)概念の形成について検討する。1949年の中華人民共和国〔以下、中国と略記〕建国以前においては、「故国」は韓国系中国人(Korean Chinese)にとっては朝鮮(Korea)を意味していた。しかし文化大革命の間に彼らは中国を「祖国」(“fatherland”)として受け入れた。そしてさらに文化大革命以後には、彼らは再び「朝鮮民族としての」アイデンティティ(“Korean” identity)を強調することができた。1980年代半ばまで、中国に居住する朝鮮族は文化的にも政治的にも北朝鮮(North Korea)に近接していた。1980年代に彼らは韓国(South Korea)に再接近し、主に労働の機会を求めて多くの人が韓国に移住しはじめた。そして韓国政府が彼らへの入国ビザ発給を制限した時に、韓国系中国人は「故国に帰還する」(“return to the homeland”)権利を主張した。彼らはこの主張を、彼らの父祖が中国において反日闘争を担ったことを想起することで根拠づけた。しかしながら、新たな結びつきを得た民族上の故国(ethnic homeland)において、韓国系中国人は低賃金の移民労働者として差別され、阻害された。その結果、彼らは生国(natal homeland)たる中国へのノスタルジアを募らせた。そして同時に韓国系中国人移民は、共通民族たる韓国を文化的に異なるものとしている。

チャンズー・ソン「アイデンティティ・ポリティクスと韓国における韓国系中国人移民がいだく『故国』の意味」

このことは「故郷狗肉館」(“Homeland Dog Meat Restaurant”)に示されている。彼らはその狗肉館の肉は、韓国の肉とは違う(より美味)のだと主張している。以上のような背景を有する韓国系中国人の事例は、韓国に帰還した移住者が有する相反する「故国」の概念——それはアイデンティティ・ポリティクスの文脈においてはより複雑になる——を示しているのである。

## 1. 序

中国から移住する朝鮮族(つまり韓国系中国人)は1980年代後半から韓国で見られるようになった。彼らは中国の大きな都市の街頭で漢方薬を売ったり、小さな建設会社で働いたりしていた。冷戦時代のあいだ長年にわたって共産主義の中国に居住していた同胞とは分離されていた韓国人にとって、彼ら「韓国系中国人」(朝鮮族(Chosŏnjok))は、好機の日と同時にしばしば共感を持って見られたよそ者であった。朝鮮族移住者の労働者数はそれ以来、表1が示すように増加し続けている。とりわけ1992年の韓国と中国の国交正常化は、より多くの韓国系中国人の韓国への流入をもたらした。韓国系中国人の建設労働者やウエイトレスを韓国人で見ることができた。何千人もの韓国系中国人が「故国に帰還し、居住する権利がある」というスローガンの下で街頭デモを行った2000年代初頭には、彼らの存在はより明確になった。

韓国における韓国系中国人の公式人口は2005年では16万7589人に達し、さらに、2010年には41万人を超えた。現在では——未登録の移住者を含めて——韓国には50万人以上の韓国系中国人が居住していると推定されている。それは、約200万人の朝鮮族のほぼ四分の一が現在韓国に居住しているということを意味している。韓国統計局によると、160万人の外国人居住者の三分の一以上、そして、2013年現在での韓国における全外国人労働者のおおよそ半分が彼ら韓国系中国人によって占められている。

韓国系中国人も韓国人もいずれも同じ朝鮮「民族」(“nation”) (*minjok* 民族) だという認識を共有している<sup>1)</sup>。韓国に親族を有している「朝鮮民族」(“Koreans”)として、彼らは韓国に帰還し、居住することができるという信念——韓国人とも共有する信念——を韓国系中国人は従来から有していた。韓国人もナショナリズム的な感覚から、従来から中国やかつてのソビエト領からやってくる朝鮮族を歓迎していた。しかし韓国系中国人の数が急速に増加するにつれて、文化的衝突を含むさまざまな問題が韓国人と韓国系中国人のあいだで生じてきた。韓国人は韓国系中国人を政治的にも文化的にも「中国化」(“sinicized”) (Song 2009 : 293) されたものと見ていた。それに対して韓国系中国

表1：1990年以降の韓国における朝鮮族人口

年	総計	男	女
1990	25,215人	15,232人	9,983人
1991	36,147	19,530	16,617
2000	60,176	30,268	29,908
2005	167,589	73,497	94,092
2010	409,079	210,288	198,791
2013	497,989	262,353	235,636

出典：韓国移民局統計 [www.immigration.go.kr](http://www.immigration.go.kr)

人は、共通する「朝鮮民族」(“Korean nation”)であるにもかかわらず、朝鮮民族 (“Koreans”)として遇されていないと感じていた。労働市場の混乱の可能性を理由に韓国政府が韓国系中国人の入国ビザを制限したが故に、多くの韓国系中国人は「故国」への帰還の権利を強く主張した。そしてまた彼らは、韓国政府の入国制限を「反民族主義的」(“anti-nationalist”)とみなした。

彼ら自身の民族上の「故国」(すなわち韓国)で社会的に差別され、経済的に阻害された結果これらの韓国系中国人は、彼らがそれまで有していた「故国」の観念と「朝鮮民族」としてのアイデンティティに対して疑問を抱き始めた。その結果、中国という彼らの生国へのノスタルジアを募らせたのである。現在彼らは韓国同胞との違いを強調し、またしばしば、「中国人」(Choi 2001; Song 2009)もしくは朝鮮族 (Pak 2011)たることを強調している。彼らの多くは韓国では、ソウルの加里峰洞 (Karibong-dong) や永登浦区 (Yöngdüngp'o District) の大林洞 (Taerim-dong)、京畿道 (Kyönggi) の安山 (Ansan) 市などといったかつての工業都市などに居住している。韓国系中国人は文化的にも社会的にも自らを韓国人からは区別している。その一例は、安山の朝鮮族コミュニティにある「故郷狗肉館」や「延邊狗肉館」(“Yanbian Dog Meat Restaurant”)である。韓国系中国人は彼らの狗肉料理が韓国の狗肉料理とは違うのだと考えていることを、これらの狗肉館の存在は意味している。興味深いことに、「故郷狗肉館」という名称における「故郷」という用語は、彼らの生国たる中国を意味しているのである。「故」という文字のこのような用法は、「故国」が韓国を意味している彼らのスローガン(「故国に帰還し居住する権利がある」)の用法とは異なっている。また「故国」の意味は世代間においても異なっている。父祖が朝鮮半島の南部から移住した古い世代の韓国系中国



図1：ソウル朝鮮族会館の前で2004年11月に筆者撮影。人物の背後のスローガンは、「われわれには故国に帰還し、居住する権利がある」と書かれている。したがって、ここでは「故国」(kohyang 고향)は韓国を意味している。



図2：安山の「故郷狗肉館」。2011年筆者撮影。ここでの「故郷」(고향; 'homeland' または 'hometown')は中国における彼らの故郷を示している。

人は現在でも韓国を彼らの「故国」と呼んでいる。それに対して第2, 第3世代の韓国系中国人において「故国」は、しばしば、「自分たちの両親や祖父母が生まれ育った土地」を意味している。それに対してより若い世代の韓国系中国人にとっては、「故国」は一般的に中国を意味する。したがって今日では、韓国系中国人のあいだにおいて「故国」の観念は、政治的文脈や社会的状況、時間、そして世代に応じて変化し、柔軟である。それと同時に彼らのアイデンティティも状況や時、世代に応じて議論の対象となりうるのである。

近年、韓国系中国人の民族的帰還としての韓国への移住が研究者の関心を引きつけ、そのなかでのいくつかの研究が彼らのアイデンティティとその変遷の問題に焦点を当てている (Kim, M. 2014 ; Hong et al. 2013 ; Fang 2013 ; Park and song 2010 ; Song 2009 ; Kang 2008 ; Lee 2005 ; Choi 2001)。また、韓国系中国人の文学作品 (Kim, E. 2006) にもとづいた、彼らが抱く「故国」観念に関する研究も存在する。しかしながら、韓国系中国人のアイデンティティ (もしくは、さまざまなアイデンティティ) という文脈で故国の観念を検討した研究はほとんど存在しない。このようなギャップを埋めるために本稿では、韓国における韓国系中国人のあいだでの「故国」の観念の変遷と、このような「故国」観念が彼らのアイデンティティ・ポリティクスにおいてどのように用いられているのかを明らかにする。本稿は一連のインタビューと参与観察にもとづくものである。

### インタビューと参与観察

韓国系中国人に対するインタビューと参与観察は、韓国と中国の両国において2004年11月、2008年6月、そして2011年2月に行った。韓国でのインタビューと参与観察の大部分は、ソウルの加里峰洞や大林洞区、安山の元谷洞 (Wŏngok-dong) そして京畿道——これらは韓国系中国人が自分たちのコミュニティを形成している地域である——の韓国系中国人の移住労働者に対してなされたものである。また中国では、韓国系中国人が集中している吉林省 (Jilin Province) の延辺朝鮮族自治州 (Yanbian Korean Autonomous Prefecture) で行われたものである。インタビューは韓国と中国両国においてそれぞれ2-3週間行った。韓国では17名 (うち5名は滞在中に2回以上面接)、中国では8名にインタビューを行った。

ソウルでの参与観察と大半のインタビューは、永登浦区にある大林洞のソウル朝鮮族教会 (Seoul Chosŏnjok Church) にて行った。安山でのインタビューの大半は元谷洞と安山朝鮮族教会にて行った。これらふたつの朝鮮族教会とその周辺地域は、暇なときに

チャンズー・ソン「アイデンティティ・ポリティクスと韓国における韓国系中国人移民がいだく『故国』の意味」

韓国系中国人がよく集まる場所なので、彼らと会うには都合の良い場所であった。とくにソウル朝鮮族教会は、彼らが友人と会ったり仕事の情報を得ることができる場所として人気のある場所である。さらに教会は、ビザ関係のサービスを代行する旅行代理人とともに、雇用サービス事務所（Employment Service Office）をも併設している。また教会は、韓国系中国人女性に対して安価な臨時宿泊施設をも提供している。冬の寒い時期には、仕事を得られない韓国系中国人労働者（建設労働は冬季には極めて低調である）が、暖房とベンチ、トイレが備わっている教会の2階に集まっている。そこに来ている韓国系中国人は必ずしもキリスト教徒ではなく、実際にも私は、日曜日以外には（教会のスタッフを除いて）キリスト教徒の韓国系中国人に出会ったことはない。気候のいい時期には教会の前でチェスをしたりタバコを吸ったりして過ごす者もいる。仕事がないときには常にそこで出会うので多くの者はお互い顔見知りである。

これらの韓国系中国人の大半は「暇つぶし」のためにそこにいるので、彼らと話すことや彼らの交流の輪に入ることは比較的容易であった。私は毎日通い、そして（ニュージーランドをベースとする朝鮮民族出身の研究者として）自己紹介をした後には彼らの多くと親しくなった。彼らについてより多くを知るにつれて私に対してもよりオープンになった。また私がその場での会話の「一員」として徐々に認められていくにつれて、さまざまな話題をわれわれは共有した。そして彼らはニュージーランドに対して非常に興味を持ち、ニュージーランドの朝鮮民族のことだけではなくそこでの生活ぶりについてもさまざまなことを聞いてきた。数年後に再度訪問した際に幾人かの人が私を覚えていてくれて、旧交を温めた。彼らは中国の故郷のことや韓国での仕事、韓国人の雇い主のこと、さらには政治のことなど、さまざまなことがらについて話してくれた。とくに韓国での総選挙の間は政治は常にお好みの話題であった。彼らは韓国政府の韓国系中国人に対するビザの発給政策や韓中関係、韓国・北朝鮮関係、そして米中関係、等々を話題とした。私と意見が異なる場合にはいろいろな意見をのべていた。またさらに韓国系中国人と会って話すのに都合のいい場所は、永登浦区の大林洞の地下鉄駅であった。駅の中に休憩所があり、そこではいつも数人の韓国系中国人の男女を見かけた。労働者の服装や年齢（通常は40歳台から60歳台）、そして確実なこととしては「延辺訛り」などから、容易に韓国系中国人であると分かる。彼らはそのエリアをうろうろしたり、友人や親戚を待つためにベンチに座ったりして、そこを待ち合わせ場所や休憩場所として利用していた。彼らが休憩したり誰かを待っているときには彼らと話をするのは難しいことではなかった。安山では安山教会の日曜礼拝に出席した。礼拝の後教会のスタッフは



昼食を振舞ってくれ、その後人びとは教会の集会室に集まって交流を楽しんだ。またインタビューは時には、韓国系中国人が経営する教会の近くのレストランやバーでも行った。

延辺での大半のインタビューと参与観察は、延辺朝鮮族自治州の州都の延吉で行った。多くの朝鮮族とは町の「朝市」で会うことができた。そこでは毎朝何万人もの人々が多くは食料品を売ったり買ったりするために行き交っている。市場の広い道路脇にはいつも多くの人びとが腰を掛け、休憩し、将棋をしているので、彼らと出会ったり話したりするには好都合の場所であった。またふたつの有名な白山賓館 (Paeksan Hotel) と国際賓館 (Kukche Hotel) のコーヒーショップでも朝鮮族のインタビューアと面談した。

## 2. 歴史的なコンテキストにおける朝鮮族の「故国」

中国東北部の200万人の朝鮮族は、1860年代から1940年代の間に朝鮮半島から満州 (Manchuria) (中国語で東北 (Dongbei)) に移住した朝鮮民族の子孫である。朝鮮人の満州への移住の第一波は19世紀後半に起こった。それは、朝鮮半島北部から貧しい農民が豆満江 (Tuman River) を渡って“Kando” (Jiandao 間島) と彼らが呼ぶ土地に移住した時であった。20世紀初頭までの日清戦争や日露戦争、1910年の日本による韓国併合、等々の歴史的な出来事から、何万人もの朝鮮民族が満州やロシア領の極東地域に移住した。また1860年代以降のロシアの脅威に直面して、満州政策の満州植民への転換後は漢民族も満州に移住した。

満州への移民の初期段階では、朝鮮民族の移住は北朝鮮に隣接する延辺地区に集中していた。1932年に満州帝国が日本によって建国されたときに日本の当局は、満州開拓のために朝鮮人農民を半強制的に朝鮮半島南部から満州北部に移住させた。そして彼らは水稲耕作に従事しつつ満州一帯に多くの村や町を造った。

国内内戦 (Chinese Civil War) の間、中国東北部に居住する大半の韓国系中国人は——抑圧されたエスニック・マイノリティとしてのみならず農民として——中国共産党を支持していた。彼らはまた漢民族と共に強烈な反日感情を抱き、彼らとともに日本帝国主義と闘っていた。1949年に中華人民共和国が建国された後には、中国における朝鮮民族 (Chaoxianzu 中国朝鮮族) は中国の56の民族 (minzu) のひとつに数えられている。新しい共産主義国家への積極的な支持と、とくに朝鮮戦争 (1950-53年) での従軍の功績によって延辺自治州が設立されたのである (Olivier 1992 ; Lee, C. 1986)。

しかしながら、中国に居住する朝鮮族の暮らしは常に良好で平和であったわけではな

チャンズー・ソン「アイデンティティ・ポリティクスと韓国における韓国系中国人移民がいだく『故国』の意味」

かった。1950年代、1960年代、および1970年代の反右派闘争（Anti-Rightist Movement）と文化大革命においては、韓国系中国人は漢民族の主流文化に同化することを強制された。彼らは中国と中国共産党への忠誠心を積極的に証明しようと努めていた。その結果、韓国系中国人のエスニックな文化や教育はその間に弱まっていった。それにもかかわらず、文化大革命と1970年代後半に生じた諸変化によって、朝鮮族は彼らのエスニックな文化や教育をなんとか再建することに成功した。

1940年代以来疎遠になっていた、彼らのかつての故国たる韓国を「再発見」したのは1980年代初頭であった。冷戦時代には韓国系中国人は政治的にも文化的にも北朝鮮と親密であり、韓国とは全く交流を持っていなかった（Armstrong 2014 : 77）。1980年代での冷戦終焉により、彼らは韓国とくにその経済発展から学ぶようになった。1980年代には韓国にいる親族に会うための訪韓が許され、それとともに彼らは韓国の繁栄ぶりについてさまざまな情報を携えて帰国した。1988年に韓国で夏季オリンピックが開催されたときに、韓国系中国人は彼らの「故国」の経済発展についてより多くを学ぶようになった。韓国で蓄財して帰国した韓国系中国人は、新しい家を購入し、小さな事業をはじめたので、さらに多くの朝鮮族に対して同様な道を歩むことをあとおしすることとなった。これらの動きは中国東北部では「韓国熱」（“Korean fever”（*Hanguk param*））として知られるようになった。

変遷する「故国」の観念を解明する多くの文献が韓国系中国人によって著された。事実、彼らが19世紀後半に満州に移住して以来、はたしていづこが「故国」なのかについては韓国系中国人の著述家にとって最もポピュラーな話題であった。1949年の中華人民共和国建国以前は、彼らにとって「故国」とは韓国を意味していた。たとえば、『中国朝鮮族著名詩集』（*Renowned Poems of China's Chosŏnjok*）は、韓国系中国人の「故国」に言及する1920年代から1950年代の40年間にわたるさまざまな詩が掲載されている。その詩集において、「祖国」（choguk 조국）、「故国」（あるいは「故郷」（“hometown”）kohyang 고향）、「ノスタルジア」（hyangsu 향수）、「祖先」（“ancestors”（chosang 조상））、そして「古い町」（yetmaül 옛마을）といった言葉や表現がしばしば現れている。そしてそれらはすべて韓国系中国人の民族の故国たる韓国を意味しているのである。

しかしながら、韓国系中国人が中国の55の「少数民族」（“minority nationalities”）のひとつとして公式に認定され、韓国系中国人が中国を彼らの「祖国」として受け入れた1949年以後に変化した。朝鮮戦争（1950–1953年）の間およびその後、韓国が「敵国」であるのに対して北朝鮮は「母国」となった。1950年代から1970年代の詩は、韓国系

中国人が中国に対する忠誠心を示そうと努めていることを表わしている (Kim, E. 2006)。しかしながら文化大革命以降は、韓国系中国人はエスニック・アイデンティティの復活を経験した。文化大革命以降のよりリベラルな雰囲気の中で、中国の韓国系中国人コミュニティは以前よりも自由に「内面化」されあるいは抑圧された「故国」観念を表明し、また彼ら自身のエスニックな文化を推奨していった (Kim, E. 2006)。この間に、韓国系中国人が著した文献において「故国」は、彼らの父祖の故国たる韓国を含むようになった。1980年代の冷戦の終焉に伴い中国と韓国の関係も改善された。その結果、長年のあいだ疎遠となっていた韓国に居住する親族を訪問することが認められた者もいた。このような機会を得ることで、父祖の故国への新たなノスタルジアが生まれ、また韓国は「故国」であるとともに新たなチャンスをも秘めた土地として現れてきた。

このような歴史的な変化が現れる間に、変遷する中国の経済状況が中国東北部の朝鮮族とその親族の地位に影響を及ぼした。1980年代に中国の中央政府は社会主義経済を追求したので、中国東北部の漢民族の農民は彼らの経済的基盤を農業から商業、林業へと多様化させていった。しかし朝鮮族に関しては、伝統的な水稲耕作からより利益の上がる経済活動への移行は漢民族よりも緩慢であった (Olivier 1995)。このことから、1980年代と1990年代を通して中国東北部の朝鮮族の経済的地位が低下した。中国の東部と南部の沿岸部の諸都市は新たな経済の中心となり、反面に中国東北部の経済は停滞した。これらの諸変化は韓国系中国人が中国のみならず彼らの母国たる韓国の大都市に経済的なチャンスを求めて移住するようにと導いていったのである。

### 3. 民族的な故国との再度の結びつき

上でのべたように、1980年代以降に韓国系中国人は韓国に移住しはじめた。彼らが移住する主たる動機は経済的なもので、自らの出身民族国に帰還するというケースにおいては、それは世界共通の動機である (Tsuda 2009 参照)。韓国での給与は一般的に中国におけるよりも高い。私がインタビューした韓国系中国人労働者によると、韓国では技能と職種に応じて1日に7万ウオンから13万ウオン (約60ドルから120ドル) 稼ぐとのことで、それは中国東北部での給料の4倍から6倍におよぶ額である。中国沿岸部と比較して中国東北部では雇用機会が少ない故に、韓国系中国人を韓国その他の国で働き口を求めることへと駆り立てた。このことはとくに経済改革以後に農業が実入りの少ない職種となったゆえに、とくに農民に当てはまることである。また都会と地方での経済格

チャンズー・ソン「アイデンティティ・ポリティクスと韓国における韓国系中国人移民がいだく『故国』の意味」

差は中国においてより大きくなってきている。さらに、年金と退職金を受給できる政府の公務員とは異なり、農民はそのような利益を得ることができない故に不安定さはさらに大きくなってきている。

さらにまた、韓国系中国人の韓国への移住の背景としては、文化的、政治的理由もある。まず第1に、彼らは韓国と同じ民族でありまた言語も同じであるが故に韓国に移住した。彼らは「朝鮮民族」であり、韓国は彼らの父祖の故国であるという感情が韓国へ行くことへの強い願望を推し進めた。このことはさらに、自分たちが韓国社会の一員としての資格があるという感覚を彼らに与えている。これは始原的でエスニック、そしてロマン主義的なナショナリズムを反映している。そこでは文化的、血統的な結びつきが国民としての法律上のメンバーシップよりも重要なのである。1992年には約30名の韓国系中国人の知識人が、彼らの民族的な故国（韓国）に関わる経験や願望を表明するエッセーを著しており、これらのエッセーを編集した書物が韓国で出版された（Rim et al. 1992）。彼らの著作は韓国系中国人が彼らの父祖の故国に思いを致す、民族的でロマン主義的な強固なナショナリズムを示している。さらに、韓国の民族的ナショナリズムは韓国系中国人をも包含することを求めている。たとえば、上で言及した詩集をソウルで出版した韓国人たる金（Kim）はその書物のまえがきでつぎのようべている：

この国〔韓国〕はあなた方の国である。この国はわれわれ〔韓国人〕と共にこの国土を有する者としてあなた方が住まうべきあなた方の故国である。……あなた方は異国人と呼ばれるかもしれないが、しかしそれにも関わらずこの国の持ち主である（Kim et al. 1992: 3）。

中国に居住する多くの韓国系中国人は、自らの親族を呼び寄せることができる親族を韓国に有している。朴さん（Mrs. Park）（50歳代の女性）は、これまでに一度も会ったことのない親族に会いたい人びとの気持ちを代弁している。

私は親族が韓国に住んでいるので韓国をぜひ訪問したかった。私の両親が存命中、一生のうちで一度はわれわれの故国を訪問したいと常に言っていた。

朴さんのこの言葉に表れているように、韓国系中国人が抱いている韓国に在住する親族との再会への願望は、彼らの父祖の「故国」へのノスタルジックな感情としばしば混じり合っている。韓国社会は1980年代に在外韓国人に対して——かつてはなかったことであるが——大きな関心を払いはじめた。多くのジャーナリストやテレビのプロデュー

サー、著述家、そして研究者たちが、1990年代を通して在外韓国人に関する記事やドキュメンタリー、研究論文を発表した（Yoon 2011 参照）。とくに、中国での200万人の朝鮮族とソビエトの50万人の朝鮮民族の存在が、1990年代初頭に韓国人の関心を引きつけた。韓国メディアは、韓国系中国人とソビエト在住の朝鮮民族を、彼らの歴史とたくましい生き様に共感しつつ、極めて民族的なナショナリストの視点から描いていた<sup>2)</sup>。とくに、韓国系中国人が長いあいだ故国から離れていたにもかかわらず、朝鮮民族の文化と伝統を維持し続けているという事実の故に韓国人は彼らに対して強い尊敬の念を抱いた。韓国系中国人もまた——弱小のエスニック・マイノリティとして、彼らが中国における自らの地位が相対的に低下していくのを見ていた——1980年代に、再度結びつきを強めた民族上の故国を肯定的で期待を込めた目で見ていた。比較的にハイレベルな韓国系中国人の教育と生活水準が1980年代と1990年代に変化していた（Lee, C 1986）。1980年代までには、中国東北部の韓国系中国人は「相対的な〔地位の〕低下」を実感していた（Song 2009）。このような事情は反面に、彼らが民族上の故国と「再度結びつけられた」時に大きな期待感を抱かせるようになった。さらには政治的にも大きな無力感が韓国系中国人のあいだに蔓延していた。とくに延辺朝鮮族自治州の朝鮮族の人口が減り続け（表2参照）、中国東北部の他の地域の韓国系中国人は、自らの自治都市や村のマイノリティであると感じはじめていた。

表2：延辺朝鮮族自治州における韓国系中国人の人口の変化

年	1952	1964	1990	1993	1999	2000
朝鮮族の割合	62%	48.3%	40.54%	39.3%	38.8%	36.2%

出典：延辺朝鮮族自治統計局（Pang 2000）

自治州や村の韓国系中国人の人口が減少するにつれて、韓国系中国人はマジョリティの漢民族によって差別されていると感じるようになった。中国の「寛容な」少数民族政策にもかかわらず、中国に暮らす多くの韓国系中国人は主流の漢民族よりも劣位の「二級市民」として扱われているという思いを強く抱いていた。私がインタビューしたある人物（黒竜江省出身50代前半の男性）はつぎのようにのべている：

中国には差別は存在しないというのは本当かもしれない。しかし、朝鮮族はエスニック・マイノリティであるので中国で権力を握ることは困難だ。というのは、漢民族が政治的権力を独占しているからだ。朝鮮族の自治村や町においても地方の権力は漢民族が握っており、朝鮮族は単に名目的地位におかれているだけだ。

チャンズー・ソン「アイデンティティ・ポリティクスと韓国における韓国系中国人移民がいだく『故国』の意味」

さらに別の幾人かのインタビューは延辺やその他の中国東北部での漢民族と朝鮮族の対立について語った。李さん（延辺の地方政府の事務所で働く40代前半の女性）は、朝鮮族の人びとが中国東北部のマジョリティの漢民族に対していかなる感情を抱いているのかについて語っている。

私は漢民族と口論することが時にはありますが彼らとの争いに勝つことはできません。勝ったことは一度もありません。私たちと漢民族のあいだに争いがある場合、彼らはいつも非常に狂暴 (*sanapta* 사납다) なので、私たちは勝つことはできません。漢民族は善悪には無頓着です (“*toriril an ttajinda*” 도리를 안 따진다)。私たち朝鮮族のあいだでは、私たちのこどもが他のこどもと喧嘩している場合には、私たちはまず自分のこどもを叱り、そして争いをやめさせます。でも漢民族の両親は違います。彼らはどちらが悪いかを考えることなしに、真っ先に自分たちのこどもの味方をします。彼らは無礼です。彼らは私たちとは違います。

これらの発言は、はっきりとは表明されないとしても朝鮮族と漢民族のあいだに対立関係が存在することを物語っている。このようなことすべてから、朝鮮族が再度結びつきを強化した民族上の故国たる韓国で新たなチャンスを求めることになったのである。1980年代後半までには「韓国熱」がすでに広がっており、「血は水よりも濃い」 (“*blood is thicker than water*”) という言い回しが中国での韓国系中国人コミュニティのモットーとなった (Song 2009)。

#### 4. 「民族上の故国」での疎外と「生国」の復活

##### 民族上の故国での疎外

韓国系中国人が韓国にはじめてやってきた時に抱いていた当初の希望や期待とは異なり、彼らは早々に移民労働者としての苦しい生活実態に直面した。韓国での仕事は全般的に中国での仕事よりもきつかった。彼らの多くは肉体力労働の経験がなく仕事が非常にきつと感じた。また韓国系中国人労働者のなかには、韓国人の雇い主から給料をもらえなかった者もいた。そのようなネガティブな経験は彼らの「故国」の観念、そしてさらには「朝鮮民族」としてのアイデンティティをどのように形づくっていくかについて——それらは世界の他の地域でも出身民族国に復帰した移住者が直面した現実である——影響を及ぼしている (Tsuda 2003 ; Song 2009 参照)。韓国に居住する韓国系中国人のそのようなネガティブな経験は、たとえば韓国への入国ビザ取得の困難さや韓国人による差別的処遇、そして韓国系中国人と韓国人のあいだの文化的差異、等々によって

さらに増幅された。

ロマン主義的なナショナリズムに依拠した当初の歓迎ぶりとは異なり、韓国系中国人「同胞」に共感を有していた韓国人は徐々に変化していった。公式、非公式の韓国系中国人労働者の数が増大したことに對して韓国政府は懸念を抱くようになった。彼らが労働市場にもたらすことが懸念される混乱を恐れたからである。さらにまた、韓国系中国人労働者が韓国で犯す犯罪も、一般の韓国人のあいだでの彼らに対する否定的見かたを醸し出した。このことは、たとえば「黄海」(Yellow Sea) (2010年、羅弘鎮 (Hongjin Na) 監督) をふくむテレビドラマや映画などに最もうまく描き出されている。そこでは朝鮮族の男性がギャングや詐欺師として描かれている。これは、より肯定的に描かれていた2000年代初頭までの韓国系中国人、とりわけ韓国系中国人女性のイメージとは正反対である (Song 2006)。いずれにしろ、彼らに対するメディアでの否定的な描写によって、民族上の故国において彼らはさらに阻害され、周縁化していったのである。

韓国系中国人を最も苛立たせているのは韓国政府が入国ビザを制限することである。彼らにとってこのことは韓国で彼らが直面した差別のなかで最も不正で非道なことであり、多くの韓国系中国人は彼ら自身の「故国」による裏切りであると考えている。彼らの大半は「朝鮮民族」としての正当な地位にもとづいて韓国に居住する資格があると考える傾向がある。入国目的が労働することだけでその後には帰国する場合に韓国当局は自由な入国は認めないということに對して、私の多くのインタヴューアは不満を口にしていた。このことは、韓国系中国人が「朝鮮民族」(“Korean Nation”) を、民族としてのすべての朝鮮族が正当に所属する現実のコミュニティとして解釈していることを示している。朝鮮民族(したがって韓国)への所属に関して韓国系中国人が抱く、所属資格を有しているという感情は、裏切られたという彼らが抱く感情——それは、韓国人が事態を正しく把握していないことに他ならないという感情——にも関連する重要な要素である。韓国系中国人男性(50歳代後半)のつぎの発言は彼らの広範なコミュニティの意見を代弁している：

われわれは韓国にいる他の朝鮮民族と同じ朝鮮民族だ。われわれはここで働いて金を稼いで中国へ帰りたいだけだ。物乞いをしているのではない。われわれは仕事をしたいし、それは韓国経済のためにもなる。なぜわれわれが入国することを制限するのか。

韓国人がアメリカや日本といった他の国からやってくる民族上の朝鮮人に対しては差

チャンズー・ソン「アイデンティティ・ポリティクスと韓国における韓国系中国人移民がいだく『故国』の意味」  
別していないことにとくに怒りを感じていた。ある韓国系中国人男性のインタヴューア  
はつぎのように語った：

韓国人は韓国系アメリカ人は尊重するがわれわれ韓国系中国人は軽んじている。これは公平ではない。われわれに過ち (*choe* 罪) があるとすれば、それは、韓国系アメリカ人はお金を持っているがわれわれは持っていないということだ。アメリカに行った朝鮮民族を見ればいい。彼らは金儲けのためにアメリカに行った。それに対してわれわれ韓国系中国人については、われわれの父祖が民族独立のために日本と戦うために中国に行ったのだ！しかし今日韓国人はわれわれを差別し、公正に遇していない。中国を見ればいい。中国は100年前に中国を去った *huachao* (在外中国人) を受け入れている。

この発言でインタヴューアは、民族への忠誠の歴史において韓国系中国人が道徳的に優れているということを強調していた。つまり彼らは民族主義的な忠誠心が民族としてのメンバーシップの最も重要な条件であると確信しているのである。このことは彼がふたつの異なるタイプの「朝鮮人」を比較していることから明らかである。すなわち、「金儲けをするために」アメリカに渡った人びとと「朝鮮民族独立のために戦う」ために中国に渡った人びとである。

とくに韓国系中国人は1999年の在外朝鮮民族法 (Overseas Koreans Act) が、彼らを韓国の「朝鮮民族」の正当な構成員とは考えていない反面、西洋諸国在住の朝鮮民族を受け入れていることの明確な証拠であると確信している。この法律は「国家間での序列」(“hierarchical nationhood”) を設けた。そしてこの序列において韓国系中国人は最低の地位に位置づけられる反面、韓国在住の同族者やアメリカのような豊かな西洋諸国からやってきた同族者は上位の位置を占めている (Seol and Skrenty 2009)。その後まもなくこの法律は韓国憲法裁判所によって違憲と宣言された (Park and Chang 2005; Lee, J. 2003)。この法律は韓国系中国人の韓国に対する反感をより高めた。彼らは「故国」が彼らを裏切り、切り捨てたと感じたのである。黒竜江省出身で父親が慶尚北道生まれの60歳代の韓国系中国人男性の嚴氏 (Mr. Eom) もそのような感情を抱いている：

韓国系中国人が韓国に着いたときから、おおよそ彼らは朝鮮民族ではないと感じる。空港にはふたつの入り口があって、ひとつは「朝鮮民族」そしてもうひとつは「外国人」であり、私は父祖の故国において朝鮮民族ではない (外国人である) と感じる<sup>3)</sup>。朝鮮民族はその軽蔑的な態度とまなざしで、われわれは「朝鮮民族」ではなく「中国人」だということを示している。



同様な感情を抱きつつ、韓国系中国人労働者は韓国の雇い主に対しても批判的である。彼らの多くは私に、同じ仕事をしていても韓国人の同僚よりも彼らの給料は低いと語っていた。中国で教師をしていた50歳代の韓国系中国人女性は、1990年代に韓国において仕事の上でいかに差別されていたかを語っている：

私は延辺では教師をしており、働くために1990年代に韓国にやってきました。私の最初の仕事は慶尚道の建築現場で壁にペンキを塗ることでした。仕事は非常にきつく、1日中仕事をしてると体が痛みました。韓国人の同僚は1日7万5千ウォンの給料をもらっていました。彼らとまったく同じ仕事をしているにもかかわらず私は5万5千ウォンしか給料をもらっていないことを、仕事をはじめてから数か月後に知りました。私はそのことが信じられず非常に腹が立ちました。そこで親方には何も言わずにその日のうちに仕事をやめました。

職場におけるこのような差別慣行は彼らの雇い主に対してのみならず韓国社会全体に対する反感をも強めている。それにもかかわらず、南アジア（バングラディッシュやネパール）やその他の国籍の外国人労働者は、韓国系中国人よりも給料が低いということを知っている。彼らによると、職場とくに建築部門においては民族的な序列が存在している。韓国人は重機の操作を含む最も重要で専門的な仕事を担い、他方で韓国系中国人は給料が低いそれにつく仕事を担っている。そしてその他の朝鮮人ではない外国人労働者は最も給料の低い最低の仕事を担当するのである<sup>4)</sup>。

給与上の差別と入国ビザ制限のみが韓国系中国人が民族上の故国で彼らが疎外感を感じる理由ではない。彼ら自身と韓国人のあいだで、同じ「朝鮮民族」であるにもかかわらず大きな文化的ギャップがあると感じている。そのようなギャップのひとつがことばであって、彼らは韓国人が日常会話のなかであまりにも多くの外来語を使用することに対して不満を抱いている。韓国の多くのレストランで働いていた40歳代の朝鮮族出身の女性は、韓国系中国人を見下す韓国人の高慢さとともに、このことばの問題についても語っていた：

韓国で働きはじめたころはことばの違いから苦労しました。ソウルのレストランで働いていたころは、私のしゃべる朝鮮族のことばをお客さんがわからないことがありました。そして私のことばを聞いて、中国から来たのかと乱暴に聞きました。最初は私の言っていることがよく分かってもらえないことを申し訳なく思い、彼らの話し方を学ぼうとしました。しかし後には、私のことばを直そうとする人のことが本当に煩わしくなりました。私たち朝鮮族は長年中国に住んでいたため独自のアクセントを身に付けています。しかし韓国人は朝鮮に住んでいながら外来語を

チャンズー・ソン「アイデンティティ・ポリティクスと韓国における韓国系中国人移民がいだく『故国』の意味」

——それと同じ意味の母国語がありながら——頻繁に使用します。一体誰が、誰のことばを直すべきなのでしょう。

建築部門で働いている韓国系中国人男性はしばしば、韓国人が職場で日本のことばを使用することをも批判している。実際にも、建設と設計部門の人びとは植民地時代から使用されているかつての日本語の用語を用いる傾向がある。さらにまた、韓国人は親族間の強固な紐帯に対する伝統的な価値観を失ってしまったのに対して、彼ら自身は親族間の親密さと相互扶助の伝統をおも維持している、とも語っている。韓国に親族を持つこれらの韓国系中国人は、彼らへの親族の態度に対する失望の気持ちを表明している。韓国でのこれらのネガティブな経験のすべてが、韓国と韓国人に対して反感を抱かせる原因となっているのである。韓国系中国人のあるひとりのインタビューアー（延迎出身の49歳のレストラン従業員の方さん（Mrs. Pang）は、1997年の金融危機が韓国を襲った時にある種の満足感を抱いたとのべた：

1997年末の金融危機の時にはある種の幸福感をさえ得た。「ははーん……韓国人め……いつも高慢な態度をとっているから、いま韓国で何が起きているか知ってるよね。いつも私たちを見下していたわね。今は自分のことを考えなおす時よ。どれだけ私たちに対して高慢で、中国からやってきた人たちに対して冷たかったかをね。

このような反感は同時に韓国系中国人に対して、彼らの生国（natal homeland）たる中国に対するノスタルジアをももたらしたのである。

## 生国の復活

韓国と韓国人に対する反感は自分が「中国人であること」（“Chineseness”）の再評価を韓国系中国人に対してもたらした。この時期はグローバルな経済規模を持つ大国として中国が台頭した時期と重なっている。私が参与観察を行ったソウル朝鮮族教会においてある韓国系中国人が「腐敗した」韓国社会について語ってくれた：

韓国社会は腐っている。とくにこの国のエリートはひどい。中国ではある社会部門が困難に直面した場合には、国全体でその部門あるいは地域を助けようとする。しかし韓国ではそのようなことは起こらない<sup>5)</sup>。

このようにして韓国系中国人は彼らが「中国人であること」——以前はそれを否定す

るか隠そうとしていた——に誇りを抱くようになっている。韓国系中国人のなかには、彼らがバイリンガルで両文化に通じていることを誇りにし、韓国人よりも優れていると感じる者もある。先に言及した嚴氏はつぎのようにのべている：

中国人であることは悪いことではない。われわれ朝鮮族は韓国人よりも広い視野を有している。というのはさまざまな民族が混在する中国に住んでいるからだ。何よりも韓国人と違ってわれわれは2か国語を話すことができる。

日常生活において韓国系中国人は韓国料理と中国料理のブレンドである彼らの豊かな食文化を誇りにしている。彼らと韓国人はキムチやナムル（味付けした蒸し野菜）、そして犬肉料理をも含む多くの類似の料理を共有しているが、韓国の料理は「故国」の料理とは違っていて、それらを味わえなくて残念であると韓国系中国人は思っている。韓国人男性と結婚したある女性のインタビューアは中国吉林省の田舎町でかつて食べていた焼菜（pokkumch'ae）（強火で炒めた野菜）が食べられなくて残念だと言っていた。韓国人の夫がそのような料理を好まないの、彼女は家ではあまり作れないのである。食べ物におけるそのような微妙な違いから、彼らの生国へのノスタルジアが生まれてくるのである。

さらに、私がインタビューした大半の韓国系中国人は、韓国の犬肉料理は中国のものとは異なっており、それらよりもまずいと感じていた。韓国系中国人は犬肉料理が好きで、それを公言することには躊躇しない。しかしながら、大半の韓国人はたとえ彼らが犬肉料理を食べていてもオープンに話すことにためらいを感じる傾向がある。ソウルの加里峰洞と安山の元谷洞の韓国系中国人コミュニティには、犬肉料理を出す多くのレストランがある。

安山で私は「故郷狗肉館」（“Homeland Dog Meat Restaurant”）という看板を掲げているレストランを見つけた。そこには、韓国系中国人風の犬肉料理を出す書かれている（図2参照）。ここでいう「故国」は明らかに、彼らの生国たる中国を意味している。このレストランの近くにもう一軒の犬肉レストランがあり、「延吉犬肉レストラン」（延吉狗肉館）（図3）という名前である。これは、このレストランが延辺朝鮮族自治州の州都たる延吉の出身の者が経営していることを意味している。これらのレストランで出される料理はすべて、上で言及した焼菜を含む韓国系中国人あるいは中国東北部の料理である。



図3：安山の延吉犬肉レストラン，2011年筆者撮影

韓国系中国人の店はしばしば彼らのアイデンティティを示すために漢字を使用し、また「中国」（中國）あるいは「北京」といった中国を表す名称をよく使用する。これはソウルの加里峰洞のカラオケバーの場合である（図4）。店の看板が「中國」や「北京」となっている場合には、韓国人客に対しては入店意欲をすぐ反面に、韓国系中国人と中国人に入店することを促すことをこれらの店が意図していることはまちがいない。韓国系中国人と中国人居住者が増えるにつれて、韓国系中国人と中国人の客をターゲットにしたそのような店が増えてきている。これらの地区の“PC-bangs”（ネットカフェ）でも「中国人専用」として韓国人を明確に排除している店すら存在する。

## 5. 「故国」とアイデンティティ・ポリティクス

すでにのべたように、1992年のエッセー集を編集（Rim et al. 1992）した韓国系中国人著述家はしばしば「故国」に言及した。しかしながらこの「故国」の観念に対して、多くの韓国系中国人が1980年代と1990年代に韓国を訪問しはじめたときに異議が唱えられはじめた。彼らが韓国人の「冷ややかな」態度に直面——それは彼らが抱いていた「朝鮮民族」や「故国」の観念に背くものであった——したときに、自ら良しと考える方法で朝鮮民族への忠誠心を明らかにしようと試みた。韓国系中国人は「朝鮮民族」の



図4：ソウルの加里峰洞の繁華街。韓国系中国人の店は自らのアイデンティティを示すために「中国」や「北京」という文字を看板に掲げている。

観念を韓国同胞よりもより広くかつ包括的に解釈した。彼らの知識人のなかには、すべての朝鮮民族が含まれるより始原的な観念を示す「朝鮮民族」(“Paedal minjok”) (朝鮮民族の子孫の人びと) という用語を用いる者もある。この「大朝鮮民族」(“Greater Korean Nation”) の観念とともに、韓国系中国人は人びとを市民権によって区別するのではなく、朝鮮民族すべてを彼らが生まれながらに所属している「民族」(“minjok”) (nation あるいは race) と考えるのである。上述のエッセー集たる『ソウル熱』(Seoul Fever) において、韓国人は彼らの「狭い」民族の観念をより包括的な朝鮮民族 (“Paedal minjok” あるいは “Paedal kyöre”) の観念に変えなければならないということを示唆することで、この点を強調している (Rim et al. 1992 : 52)。彼はまた韓国系中国人に対する入国ビザ制限政策を「度量の狭い政策」と考えている (Rim et al. 1992 : 52)。そして同時に、韓国系中国人は韓国政府の多文化主義政策に対して多かれ少なかれ疑問と批判を有しており、彼らは朝鮮族として他の民族よりも優先されねばならない

チャンズー・ソン「アイデンティティ・ポリティクスと韓国における韓国系中国人移民がいだく『故国』の意味」

と主張している (Hong 2014)。

さらに、韓国系中国人は韓国と北朝鮮の同胞よりも「純粋な」朝鮮民族であり、より優れてさえいると信じる傾向がある。というのは、朝鮮が日本の植民地支配下にあるときに彼らの父祖は日本と戦ったからである。彼らは韓国系中国人に対する「冷ややかな」態度を批判する際に、しばしばこの事実を強調する。2004年に私がはじめて延辺を訪問した時に、私の韓国系中国人ホストは彼らの反日闘争とかかわりのある場所を私に紹介するためにその地域を案内してくれた。そのなかで彼は、韓国系中国人は朝鮮の独立のために日本人と戦うという決意にはいささかの揺らぎもなかったことを強調した。中国政府の延辺の公式紹介記事では、「延辺のすべての村は反日闘争の英雄を生みだし、その地域のすべての溪谷には彼らを讃える石碑が存在する。」(Choe, S. 1989: 83) 事実、韓国系中国人は通常の韓国人よりも朝鮮民族統一に対するより強固な願望を抱いている。彼らはこれらふたつの国民を統一するという道徳的責務を感じている。私がインタビューした多くの人びとは、北朝鮮と韓国の同胞に対して、これらふたつの国民は分断され相互の敵対心に苦しんでいるという意味で共感を表明していた。韓国と中国における多くの韓国系中国人は、民族の統一を実現するために最善を尽くしていないとして韓国人を（あるいは、彼らが北朝鮮のことを話す場合には北朝鮮人を）批判している。

民族的な「故国」との情緒的紐帯が極めて強固であるゆえに、2004年に韓国の活動家の支援と導きによって何百人もの韓国系中国人が、平等な朝鮮民族としての権利と「故国に帰還し居住する」権利を求めてデモ行進を行った。中国との絶縁を表す象徴的行為として中国のパスポートを焼き捨てる者もいた。このことは他の韓国系中国人のみならず中国当局の関心をも引き起こしたことは明らかである。彼らは「民族上の故国」に帰還し、居住する権利を要求しているが、実際には韓国に永住することを希望する者はほとんどいない。通常は、彼らの目的は韓国で働いて、十分な金を得たら帰国することであった。

しかしながら1980年代後半以来の朝鮮族の民族上の故国たる韓国との遭遇は、彼らが抱くアイデンティティや民族、父祖の地、故国の観念、そしてとくに「故国」の意味について真剣に再検討することを促した。この再検討は韓国系中国人の知識人がこの問題に関する何冊かの書物や論稿を刊行した1990年代に集中していた。「故国」に関する議論の大半において韓国系中国人は、彼らの民族的集団の出自たる「民族上の故国」（朝鮮）と、彼らが「生まれた」「受け入れられた故国」（中国）を区別した。これらふたつの「故国」のあいだで、多くの韓国系中国人は、1990年代の韓国でのネガティブな経験

をした後では、中国の「育ての／受け入れられた」故国を優先させている。

金 (Kim 1998) は、「生みの親」(“birth parents”) (韓国系中国人が「生を受けてくれた愛情」を受けた朝鮮を意味する) *naajun chōng* と、「養親」(“adoptive parents”) (「養ってくれた愛情」(“love of parenting”) *kiwōjun chōng* を受けている中国) というメタファーを用いている。「養ってくれた愛情」の方が「生を受けてくれた愛情」よりも大きいと主張することでキム (1998 : 203) は、韓国は韓国系中国人が単に「訪問者」として居住する場所にすぎないのに対して、彼らは中国に基盤を置くべきことを示唆しているのである。同様に、鄭 (Chōng 1996) は「結婚した娘」との類推を用いることで、元々の故国 (朝鮮) よりも受け入れられた故国 (中国) の重要性を強調する。ここでは韓国系中国人は、中国人男性と結婚した朝鮮民族の娘にたとえられている。鄭によれば、そのような娘はまずは彼女の夫そして彼の両親に仕え、夫の家族の生活様式を学ばなければならない。鄭 (1996 : 271-272) は韓国系中国人に対して、中国における移民マイノリティとして彼らは自らの民族上の故国との強い結びつきを確立することで、中国に脅威を与えるべきではないという警告すら発している。この「結婚した娘」との類推は、もし彼らが民族上の故国との結びつきを強めようと試みるならば、主流たる漢民族がなにがしかの対抗措置を取るかもしれないという、韓国系中国人が抱いている潜在的恐怖心を喚起させるものである (Song 2009)。

朝鮮族のアイデンティティに関する限り、私の韓国系中国人のインフォーマントは3つのグループにわけられる。第1グループの人びとは、民族的な朝鮮人である以前に中国公民 (citizens of China) であると確信している。第2グループは、朝鮮人であり中国人であると感じている人びとである。そして第3グループの人びとは、中国公民である以前に朝鮮民族の一員と感じている。多くの人は韓国への不満を表明しつつ、朝鮮民族よりも自らを中国人と考えており、そして最終的には彼らの「故国」に復帰すると明確に考えている。アイデンティティと所属意識は受入社会での移住経験によって決まるだろうということを、このことは示している (Tsuda 2003)。韓国市民権を獲得した多くの韓国系中国人は、単に韓国で合法的に働き滞在するためには便利であるからであって、韓国に永住したいがためにそうしたのではないと語っていた。たとえば50歳代の延辺出身の南氏 (Mr. Nam) は韓国市民権を取得しても自分は「中国人」だと語った：

自分は韓国国籍を持つてはいるが中国人であると今でも思っている。韓国国籍を取得したかった唯一の理由は、この国で法的な保護を受けて、追放の恐れなく働くことだけだ。この国に永住

チャンズー・ソン「アイデンティティ・ポリティクスと韓国における韓国系中国人移民がいだく『故国』の意味」

したいからではない。いい生活をするために中国に帰るまでここで働いて金儲けをしたいだけなんだ。

そのような態度は、自らを「朝鮮民族」よりも「中国人」と確信する傾向のある若い世代の韓国系中国人のあいだでとくに一般的である。安氏（Mr. Ahn）（30歳代半ばで延吉出身）はソウルのレストランの厨房で働いていた。彼はつぎのように語っている：

私にとって韓国は元々から外国で、「金儲けのために外国に行く」と考えていた。私はここに単に働くために来ただけで、長いあいだましてやずっとここに住むつもりはない。中国の経済発展は韓国の発展を超えるというは大いにありうることで、だからここでよりも中国でもっといい暮らしができると感じている。私は韓国人ではなくて中国人だ。

韓国に移住したことに関するこの説明は、韓国経済と比較して中国経済の将来の見通しが、彼らの所属意識に一定の影響を与えうるということを示している。

そしてまた、二重のアイデンティティを受容することにより安心感をもち、中国と韓国の双方を「故国」と考える人もいる。あるひとりのインタビューアがこのような見かたをつぎのように語っている。「中国では私は朝鮮人であり、朝鮮では私は中国人です。」そのような人は「故国」とアイデンティティに対してはより柔軟な態度を有している。「故国」に関して別のインフォーマントはつぎのようにのべている。「故国とは、中国であれ朝鮮であれ私が安心感をもつところですよ。」

少数ではあるが、「中国人」よりも「朝鮮民族」であることを強調する者もいる。そのような態度は韓国市民権を取得した人や韓国人と結婚した人に見いだされる。延辺出身の30歳代の女性の曹さん（Mrs. Cho）は韓国人男性と結婚し、安山の近くの城南市の羊の串焼きレストランを経営している<sup>6)</sup>。彼女は10年以上韓国に住み、韓国系中国人の夫を同伴して妹もやってきた。彼らは共同で城南地域で2店舗の串焼きレストランを経営している。当初彼女は文化的相違から韓国人の夫とのあいだに問題があったが、今では彼女は韓国で幸せに暮らしている。曹さんはつぎのように語った：

最初私は中国人と感じていました。たとえば私は国際試合では中国チームを応援していました。でもこの国でふたりの子どもをもうけてからは、今では自分は韓国人と感じています。ですから韓国チームが国際試合で勝てばうれしいです。それまでは自分のアイデンティティが何かはっきりしないときがありました。中国で生まれ育っていますが、韓国社会に溶け込んでいるのでいま中国に帰ると居心地が悪いと感じると思います。



あまり苦勞せずに「朝鮮人」に「なった」曹さんとは違って、意図的に朝鮮のアイデンティティを「受け入れ」、そして「朝鮮を故国と考えようと努めて」いるひともある。これは延辺出身で50歳代前半の許さん（Mrs. Heo）の場合である。彼女は韓国人の金氏と「結婚」して7年前に韓国にやってきた。結婚は単に韓国に来るための手段にすぎず、彼女は中国の大学に通っているふたりの息子を経済的に支えるためにそうしたのである。彼女の新たな結婚は単に書類上の偽りのものに過ぎなかった。しかし彼女は最終的には、韓国の夫と同居——そのためには韓国当局に婚姻関係を証明しなければならない——することになった<sup>7)</sup>。彼女は、今や韓国人の夫と同居しているので中国に帰る意図はなかった。暮らし向きがよくないと確信している中国に帰る意思はないので、自分が「朝鮮人」であると「考えようと努めて」いる。許さんはつぎのようにのべている：

朝鮮族の女性なので韓国での生活はものすごくストレスがたまることもある。私が中国人であると韓国人の人びとが知ると私を軽蔑の目で見ます。それは私に対してだけではありません。大半の朝鮮族女性はそうのように感じています。そうだけれど、韓国で差別をされるという経験から私は中国人であるとは考えません。なぜ？ それは、かつて中国でも漢民族によって差別されていたからです。実際、韓国は自由な国で私にとっては中国よりもいい国で、簡単に仕事が見つかり、お金儲けもできます。韓国の方がはるかにいいのです。

もうひとりの大林洞のレストラン経営者のインタビューアーである李さん（Mrs. Lee）は、国境を越えたライフスタイルにもかかわらず、「朝鮮人」としてのアイデンティティは明確である。李さんはつぎのように語っている：

私たちは朝鮮と中国の両国を基盤にしていますが（私の息子は中国にいますが私たちは朝鮮にいます）私は中国人とはいえません。韓国に来て以来ずっと自分を哀れに感じています。ここは私たちの元々の故国であり私たちが暮らすべき土地です。それにもかかわらず、私の親族はすべて中国にいますので将来中国で暮らします。朝鮮でお金儲けしたら私は中国で事業を起します。経済的環境としては中国と朝鮮とのあいだにそれほど差はないので、それがよりよい方法だろうと思います。

最後に、両国の「包摂政策」（“engagement” policies）もまた韓国系中国人のあいだでのアイデンティティと帰属意識の形成と再生の理解にとって有用であることを指摘することは有意義である。中国当局と韓国当局のいずれもが、韓国系中国人に対して特定のナショナル・アイデンティティを押し付けようと試みてきている。韓国政府は在外朝

チャンズー・ソン「アイデンティティ・ポリティクスと韓国における韓国系中国人移民がいだく『故国』の意味」

鮮民族を「再民族化」(“re-ethnicize”)する「ディアスポラの包摂政策」(“diasporic engagement policy”)を迫りつけてきている (Song 2014)。韓国系中国人は彼らが韓国政府から捨てられたのだと感じている。それにもかかわらず、政府は消極的にはあるが韓国系中国人に対してもその政策を実施している。1992年以来彼らは「在外朝鮮民族」として公式の韓国統計にカウントされている。2007年には韓国政府は主として中国と旧ソ連出身の朝鮮民族のための「訪問・雇用計画」(Visit and Employment Scheme)を採用した。この計画において韓国系中国人とソ連の朝鮮民族は、以前よりも容易に韓国を訪問し働くことができるようになった。

中国政府はさらにエスニック・マイノリティとくに中国居住の韓国系中国人のあいだでの忠誠心を強化する施策を行っている (Song 2007)。たとえば中国政府は、より多くの韓国系中国人が職を求めて韓国に移住していた2000年代初頭にいわゆる「3つの視点からの教育」(“Three Views Education”)を実施し、それをさらに強化した。これは、「歴史的視点」(朝鮮族の歴史は中国の歴史の一部である)、「民族的視点」(朝鮮族は中華圏民族 (greater Chinese nation) の一部である)、そして「祖国の視点」(中国は朝鮮族の祖国である)の3つの視点を強調している。

## 結 論

冷戦終結と中国・韓国間の外交関係が進展した後、韓国系中国人は長年関係を断っていた民族上の故国と「再度結びついた」ときに、彼らは大きな希望と期待をもって韓国にやってきた。それはちょうど中国が急激な経済発展と社会的変化——そのような状況のなかで朝鮮族の地位が相対的に低下していた——の時期であった。韓国系中国人が抱いていた「故国」や「民族」の観念から、彼らは韓国の同胞と同じ「朝鮮民族」であるが故に韓国で受け入れられるだろうと強く思っていた。それにもかかわらず彼らは、大半が肉体労働部門で働く低賃金の移民労働者としての辛い生活に直面した。さらに彼らは、韓国人によって差別され見下されていると感じた。またさらに、彼らは韓国人とのあいだには文化的ギャップがあることを実感した。彼らの民族上の故国におけるこのようなネガティブな経験から、韓国系中国人は民族上の故国において彼らと同じ「民族」によって裏切られ、見捨てられたと感じたのである。

このようなことから、韓国に対する批判的な見かたが助長され、反面に彼らの生国と中国人であることが有する肯定的側面に目を向けるようになった。同時に彼らは、自らの「アイデンティティ」と「故国」の意味を再検討した。

韓国同胞の「冷ややかな」態度に直面して、韓国系中国人は自分たちが「朝鮮民族」であることを強調し、「故国に帰還し居住する」権利を主張した。そうするなかで彼らは、自分たちの父祖が中国で行った反日闘争の歴史を強調した。韓国系中国人はさらにまた、韓国同胞よりも朝鮮民族の古くからの伝統を維持し続けていると確信している。同時にまた、韓国人と北朝鮮人に対して究極の民族再統一を達成するように推し進めることによって、分断されている朝鮮民族のための「仲裁者」であるとも彼らは考えている。そのようにすることに関して彼らは通常、韓国同胞よりも「道徳的に優れている」とも感じている。韓国系中国人は韓国の「グローバル化」と「多文化主義」に対してさまざまな感情を有しているのである (Hong 2014)。

私のインタビューは、韓国での韓国系中国人移住者はアイデンティティと「故国」の観念に関して多様なスタンスを有していること、そしてそれらは、民族上の故国に帰還した後に韓国で経験したことに応じて変化してきたということを証明している。多くの人は中国人であるとしてより強く感じている。それは彼らの民族上の故国での失望と、発展する経済と大国たる中国という将来展望にもとづいている。この傾向は若い韓国系中国人のあいだでより顕著であった。また別のグループは、彼らは朝鮮民族でもあるし中国人でもあると感じており、このことは彼らの将来にとってプラスである。さらにまた、自分は「中国人」というよりは「朝鮮民族」であると確信している人びともおり、それは韓国人と結婚し幸せな生活を送っている人びとを含むグループである。さらにまた、個人的理由から中国には戻らないと決意したが故に、意識して「朝鮮民族」たろうとする人もいる。

したがって韓国系中国人は2重のアイデンティティ (Kang 2008) と複雑な「故国」の観念 (Kim 2006) を有している。生国、「父祖の地」(中国) と民族的な故国、「母国」(韓国) とのあいだで韓国系中国人は変遷し、柔軟なアイデンティティと「故国」の観念を有する卓越した事例である。韓国系中国人にとっての「故国」の観念は、類似的な文化と歴史的経験を共有するユニークな集団としての彼らのアイデンティティを示している。彼らの「故国」は彼らを韓国における韓国人たちの主流文化とともに中国の漢民族の主流文化からも異なるものとしているのである (Kim, E. 2006 参照)。

#### 原注

- 1) 韓国語の“minjok” (민족; 民族) は“race”もしくは“nation”を意味するが、中国語の「民族」(minzu) は“ethnic minority” (shaoshuminzu 少数民族) のような、

チャンズー・ソン「アイデンティティ・ポリティクスと韓国における韓国系中国人移民がいだく『故国』の意味」

エスニック集団を意味している。

- 2) 後の1997年の金融危機において韓国人は在外朝鮮民族が韓国の発展の手助けをすることを期待した（たとえば Chong, C. 1997 参照）。
- 3) 現在すでに変更されており在外朝鮮民族と韓国市民は同一の入国用の入り口を使用している。
- 4) この慣行は広範に広がっており、非朝鮮民族外国人労働者は多かれ少なかれ「通常のこと」としてそのような差別的慣行を受け入れている。城南の「城南外国人センター」を訪問しているあいだに私は多くの未登録の韓国系中国人労働者やバン格拉デシュ、イラン、インドネシアから来ている労働者に出会った。韓国語をうまく話すあるイラン人は1日に5万ウォンから6万ウォン稼ぐと言っていた。韓国人労働者の賃金には言及していないが、これは韓国系中国人よりも低い給料である。しかし彼は、自分は「外国人」であり「未登録」であるから当然であると感じていた。朝鮮民族として韓国系中国人は非朝鮮民族の外国人よりも大きな期待を抱いており、したがって差別的な給与体系にはより大きな怒りを感じている。
- 5) 彼が話し終えたときにもうひとりの韓国系中国人男性が、韓国人たちも彼らの同胞が助けを必要としている場合には援助の手を差し伸べようとするというコメントを加えた。
- 6) 羊の串焼きは新疆のウイグル料理で、それは中国全土でポピュラーである。韓国系中国人が1990年代に韓国にこの料理を持ちこみ、韓国系中国人が住む地域には多くのレストランがある。
- 7) 許さんはレストランでの仕事上レストランに寝泊まりすることが必要な時に一度だけ（定職を有していない）韓国人の夫と会った。彼女が数年前に家政婦として働いていた時には事実であった。しかしながら、婚姻上の地位を継続するためには許さんはできるだけ頻繁に家に帰るように心がけている

#### 引用文献一覧表

Armstrong, Charles K. (2014) *The Koreas* (2nd edition). London & New York: Routledge, pp. 77-78.

Cho, Song-il ed. (2004) *Chungguk Chosŏnjok Myŏngsi* (『國朝鮮族 名詩』; Renowned Poems of China's Chosŏnjok). Beijing: Beijing Minzu Chubanshi.

Choe, Hyun. "National Identity and Citizenship in the People's Republic of China  
Choe, Hyun. "National Identity and Citizenship in the People's Republic of China and the Republic of Korea." *Journal of Historical Sociology* 19, no. 1 (2006): 84-118.

Choe, Sŏngchŏl (1989). "Chŏnch'ue kiripinnal Hyŏngmyŏng yŏlsa kinyŏmbi" [The

- monuments of revolutionists and anti-Japanese fighters shall be forever] in *Yŏnbyŏn inmin ūi Hangil T'ujaeng* [Anti-Japanese Struggles of Yŏnbyŏn People]. Yŏnbyŏn : Yŏnbyŏn Inmin Ch'ulp'ansa.
- Choi, Woogil (2001). 'The Korean Minority in China: the Change of its identity', *Development and Society* 30 (1): 119-141.
- Chŏng, Chuyŏng (1997). Saeroun Sijakeŭi Yŏlmang [The desire for a new start]. Ulsan, Korea : Ulsan National University Press.
- Chŏng, P'an-ryong (1996). *Segyesogŭi uri minjok* [Our nation in the world], Shenyang, China : Ryonyŏng Minjok Ch'ulp'ansa.
- Chŏng, Sin-ch'ŏl (2000). *Chungguk Chosŏnjok : kŭdŭlŭi miraenŭn...* [Ethnic Koreans in China : their future is...], Seoul : Sin In'gansa.
- Dreyer, June (1968). "China's Minority Nationalities in the Cultural Revolution" *The China Quarterly* (35) : 96-109.
- Fang, Mi Hua (2013). "Chaehan Chosŏnjogŭi Silch'on Chŏllyakpyŏl Kwisok ūisik kwa chŏngch'esŏng" (Strategy of Practice of belonging and identity for ethnic Koreans in Korea). *Sahoewa Yŏksa* 98 : 227-257.
- Gal, Allon, Athena S. Leoussi and Anthony D. Smith eds. (2010). *The call of the homeland: diaspora nationalisms, past and present*. Leiden ; Boston : Brill 2010.
- Hŏ, Myŏng-chŏl (2001). 'Chungguk Chosŏnjok chŏngch'esŏng yujie kwanhan sago' [Reflections on the identity maintenance of Korean Chinese] in Kim and Hŏ (eds.) *Chungguk Chosŏnjok Sahoewi munhwa usewa palchŏn chŏllyak* [Korean Chinese : their cultural power and development strategies], Yanji : Yŏnbyŏn Inmin Chulpansa, pp. 246-283.
- Hong, Yihua (2014). Korean Chinese in Multicultural South Korea : Identity Challenges and Korean Nation-Building. PhD Thesis, University of Auckland.
- Hong, Y., Song, C. and J. Park (2013). Korean, Chinese, or What ? : Identity Transformations of Korean Chinese Migrant Brides in South Korea. *Asian Ethnicity* 14 (1) : 29-51. <http://dx.doi.org/10.1080/14631369.2012.703074>
- Kang, Jin Woong. 2008. "The Dual National Identity of the Korean Minority in China : The Politics of Nation and Race and the Imagination of Ethnicity." *Studies in Ethnicity and Nationalism* 8 (1) (April 1) : 101-119. doi:10.1111/j.1754-9469.2008.00005.x.
- Kim, Chae-guk ([1996] 1998). *Hangugŭn ŏpta* [No more South Korea], Mudanjiang : Hŭngryonggang Chosŏn Minjokchulpansa.
- Kim, Eun-yeong (2006). "The Meaning of 'Homeland' in the poetry of Korean

- Chinese in China”. *Korea China Humanities Society Journal*. 16: 166-178.
- Kim, Hyejin (2010). *International Ethnic Networks and Intra-Ethnic Conflict: Koreans in China*. New York: Palgrave Macmillan.
- Kim, Kang-il (2001). ‘Chungguk Chosŏnjok sahoechiwiron’ [On the status of ethnic Koreans in China] in Kim and Hō, pp. 3-44.
- Kim, Kang-il and Myōng-chō IHō eds. (2001). *Chungguk Chosŏnjok: Sahoeüi munh-wausewa palchŏnchŏllyak* [Korean Chinese: their cultural power and development strategies], Yanji: Yŏnbyŏn Inmin Chulpansa.
- Kim, Myŏn (2014). “Kungnae kŏju Chosŏnjgüi Chŏngch’esŏng pyŏnyong kwa saenghwal minsogüi t’ajasŏng yŏngu” (Identity of Korean-Chinese and Cultural Otherness in the daily Life) *T’ongil Inmunhak Nonch’ong* Vol 58: 5-33.
- Korean Statistical Information Service (KOSIS). “Number of Foreigners Staying in South Korea”. [http://kosis.kr/statisticsList/statisticsList\\_01List.jsp?vwcd=MT\\_ZTITLE&parentId=A#SubCont](http://kosis.kr/statisticsList/statisticsList_01List.jsp?vwcd=MT_ZTITLE&parentId=A#SubCont) Accessed on May 25<sup>th</sup> 2014.
- Lee, Chae-jin (1986). *China’s Korean Minority: The politics of Ethnic Education*, Boulder: Westview Press.
- Lee, Jeanyoung (2003). ‘Korea’s Policy for Ethnic Koreans Overseas’, *Korea Focus* (July-August), [wwwdocument] [http://www.koreafocus.or.kr.ezproxy.auckland.ac.nz/essays/view.asp?volume\\_id=29&content\\_id=411&category=G](http://www.koreafocus.or.kr.ezproxy.auckland.ac.nz/essays/view.asp?volume_id=29&content_id=411&category=G)
- Lee, Min-Dong Paul (2005). ‘Contested Narratives: Reclaiming National Identity through historical Reappropriation among Korean Minority in China’ *Stanford Journal of East Asian Affairs* 5 (1): 100-112. <http://www.asia-studies.com/asia/SJEAA/2005v5.1/korea2.pdf> Accessed on January 15, 2008.
- Olivier, V. Bernard (1992). “Northeastern China’s Koreans and the Economic Challenge of the Post-Mao Era” *Journal of Korean Studies* 8: 165-198.
- Olivier, V. Bernard (1995). Korean Contributions to the Development of Heilongjiang/ Hungnyonggang. *Korea Journal*. 35 (4): 54-71.
- Pak, Chŏng-gŭn (2011). “Effects of Korean-Chinese identity on the Attitudes Toward Korea and China.” PhD Dissertation in Sociology, Kyunghee University.
- Pak, Minjŏng. “Sŏulsog ui chagun Chungguk’ Chosŏnjok milchipchi kaboni” (Visiting the Chosŏnjok area ‘Small China in Seoul’). *Ilyo Simmun* August 20, 2014. [http://ilyo.co.kr/?ac=article\\_view&entry\\_id=88471](http://ilyo.co.kr/?ac=article_view&entry_id=88471)
- Pang, Su-ok (2000). “Chunggugui sosuminjok chongch’aeek kwa Yonbyon Chosŏnjok Sahoe” [Ethnic minority policy of China and the Korean Chinese society] *Minjok Palchŏn Yŏngu* 3: 138-57.

- Park, Jung Sun, and Paul Y. Chang (2005). "Contention in the Construction of a Global Korean Community: the Case of the Overseas Korean Act." *Journal of Korean Studies* 10, no. 1: 1-27.
- Park, Kyeongju and Changzoo Song (2010). "National Identity Reflected in the post-1990s Korean Chinese Literature". *Korea-China Humanities* 31 (1): 47-73.
- Rim, Yŏn *et al.* (1992). *Sŏul Param* (Seoul Fever). Seoul: Pangmul Sŏgwan.
- Seol, Dong-Hoon; Skrentny, John D. (2009). "Ethnic return migration and hierarchical nationhood". *Ethnicities* 9 (2): 147-174.
- Shin, Gi-wook (2006). *Ethnic Nationalism in Korea*, Stanford: Stanford University Press. Song, Changzoo (2014). "Engaging the diaspora in an era of transnationalism: South Korea's diasporic engagement policy" *IZA World of Labor*. <http://wol.iza.org/articles/engaging-the-diaspora-in-an-era-of-transnationalism>
- Song, Changzoo (2009). "Brothers Only in Name: the Alienation of Korean Chinese Return Migrants in South Korea" in Takeyuki Tsuda (ed.) *Diasporic Homecomings: Ethnic Return Migration in Comparative Perspective*. Stanford, CA: Stanford University Press. pp. 281-304.
- Song, Changzoo(2007). "Korea and China over Chosŏnjok: De-territorialised nationalism vs. Zhonghua nationalism." *International Review of Korean Studies* 3 (1): 75-102. <http://www.karec.unsw.edu.au/IROKS/VOL4/IROKSVolume4.htm>
- Song, Changzoo (2006). "Nostalgia for Women of Purity, Honesty and Strength: Images of Diasporic Korean Women in Korean Films" Paper presented at the *Association for Asian Studies (AAS) Annual Meeting*. San Francisco. April 6-9, 2006.
- Tsuda, Takeyuki (2003). *Strangers in the ethnic homeland: Japanese Brazilians Return Migration in Transnational Perspective*, New York: Columbia University Press.
- Yoon, Injin (2011). *Chaeoe Hanin Yŏnguiui Tonghayng kwa Kwaje* [Trends and Future Tasks of Studies of Koreans Abroad]. Sŏngnam: Pukkoria.

## 謝 辞

著者は当初の原稿への有益な助言をいただいた二名の査読者と本論文を掲載していただいた“Urban Anthropology and Studies of Cultural Systems and World Economic Development”のスタッフに対して感謝したい。本稿の執筆に当たっては韓国政府によって設立された Academy of Korean Studies の援助を得た (MEST) (AKS-2012-BAA-2101)。